

---

# 影御用

亜荘界

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

影御用

### 【コード】

N9130P

### 【作者名】

亜莊界

### 【あらすじ】

徳川家斉が11代將軍の座に就くと、老中首座を松平定信に命じた。定信はそれまでの田沼政治を改め、質素儉約を第一にして幕政を改革しようとした。だが、そんな定信のやり方に逆らい、田沼時代に戻そうとする動きがあった。定信の下で若年寄をつとめる磐城平藩主安藤信成はそのような動きを阻止すべく、腕達者な旗本、御家人を選び、影御用を命じた。

## 「辻斬り狩り」 その1

「辻斬り狩り」その1

天明八年（1788年）の一月（旧暦）。

まだ、松の内が明けたばかり。上野広小路が湯島天神の裏門坂通りへ曲がる北大門町や同朋町の一帯は上野寛永寺の寺領と先手組、大番組などの与力や同心など貧乏御家人が住む大縄地おおなわちが広がっている。冷たい木枯らしが吹きぬけ、上野寛永寺の鐘つえのかんえいじが明け六つ（午前5時）を告げる。

その鐘の音に負けじと、上野広小路近くの北大門町の一角から、「カツツン、カツツン」と木刀を打ち合う音が響いてくる。

太平真行流という余り聞きなれない剣術の流派の道場があり、早朝稽古の音だ。

太平真行流は下野国の一の宮、日光二荒山神社の神官であった若菜わかなし真行斎を開祖とし、鎧兜姿の相手を一刀の下に倒す戦国由来の剣術。その稽古には防具や竹刀を使わず、木刀で稽古を行うので、生傷や打ち身が絶えず、周りには御家人や寛永寺の寺侍が多いが、通ってくる門弟は余り多くない。

「もつと、早く。真っ直ぐに」叱咤の声が道場に響く。

長屋の一棟を打ち抜いた三十畳ほどの道場。明り取りの窓から差し込む僅かな明かりの中で二人の稽古着姿の男が木刀を構えて対峙している。

一人は中背でがっしりした体付きの中年の男が道場の中央に立ち、どっしりとした構えで木刀を正眼に構えている。

道場主の間中晋平まなかしんへいで当年四五歳だ。

晋平は先手組同心風間家の次男で、間中道場へ通っていたが、子のない先代の道場主、間中平蔵まなかへいぞうに見込まれて養子となり、道場を継い

だ。

晋平に相對するのは五尺八寸（175cm）ほどの長身の伸びやかな体付の二十代の男。

師範代（じふほうだい）で小十人組衆（せうじゅうぐんぐみ）の内藤隼人（ないとうはやと）だ。

小十人組は將軍家が日光東照宮（にっこうとうしやうぐう）や上野寛永寺（うののかえいじ）、芝増上寺（しばぞうじやうじ）へ参拝する時、行列の前衛を務めたり、先乗りで警備を行う。

だが、そんな役目が無い時はお城の檜の間に詰めるだけで何もする事は無い。

小十人組はお目見え格の旗本だが、徒士役で禄高は百石と御家人並だ。登城の際には徒歩の雪駄履（せつた）き、袴を着用し、供は槍持ちと小者の二人がつく。

隼人はまだ前髪立ちの頃から間中道場へ通い、昨年、天明七年（1787年）に二五歳の若さで師範代となっていた。

冬の季節にも関わらず、隼人の稽古着は汗で濡れ、道場の床には汗が滴り落ちている。

隼人は腰を僅かに落し気味に、木刀を右肩の上に担ぐ様に構えている。

これは太平真行流で「兜割り」と呼ぶ構え。左足を大きく前に踏み出して重心を低く、一刀の下に兜を断ち割る豪の剣の構えだ。

隼人はその構えのまま間合いを詰め、一気に木刀を真っ直ぐに打ち出した。

「ガッツン」

鈍い手応えが隼人の木刀に伝わり、打ち込みは受止められた。

そのまま、隼人は素早く木刀を引き付けて斜に廻し、左袈裟掛け、横払い、下段からの斬り上げと連続的に木刀を振るった。

「カツツ、カツツ、カツツ」

木刀が打ち合う音が道場に響く。一旦、間合いを取ろうと隼人が足を止めた処を、手元に伸びてきた師の晋平の木刀が柔らかく小手を撃った。

「カラン」

乾いた音が響き、隼人の手から道場の床に木刀が落ちた。

「今のままで五番方合同稽古ごばんかたごうごうけいこに出場するのは心もとない。柳生新やぎゅうしん陰流かげりゅうや小野派おのはい一刀流いっとうりゅう、神道無念流しんどうむねんりゅうなどの免許皆伝の者が多く出場すると聞いている。これで、速さを鍛えろ」

師の晋平は、鉄の輪を嵌めズッシリとし持ち応えがする四尺（120cm）ほどの櫂の棒を隼人へ手渡した。

天明六年（1786年）に田沼意次たぬまおきつぐが老中を罷免され、長く続いた

田沼の時代は終焉した。

奥州白河藩主松平定信おつしゅうしろかわはんしまつただいらさたのぶが老中首座へ就任したのが、天明七年（1787年）六月。

定信は老中首座に就任すると直ぐに、田沼時代の放漫さを否定して、厳しい儉約令や賄賂人事の廃止、文武奨励ぶんぶしょうれいなどを打ち出し幕政改革に乗り出した。世に言われる寛政の改革かんせいのかいかくだ。

その定信が提唱した文武奨励の一つとして打ち出されたのが「五番方合同稽古」だ。

五番方とは旗本の中でも特に選ばれて將軍家の警護に付く新番しんぱん、小姓組こしょうぐみ、書院番しょいんばん、大番おほばん、小十人組こじゅうにんぐみの五役を言う。

將軍家の警護に付く役目柄、剣術や槍術、柔術など武術に優れた腕を持つ者が多いが、田沼時代にはこの五番方も華美に流され、風紀も緩んでいた。

この緩んだ風紀を引締める為、旗本、御家人を支配する若年寄わかどじよりいわき磐城平藩主安藤信成いちはんしゅあんどうのぶなりの下で「五番方合同稽古」が行われる事になり、小十人番の中より内藤隼人も出場する事になっていた。

安藤信成はこの時四十三歳、老中首座に就いた白河藩主松平定信の信頼が厚く、寛政五年（1793年）に松平定信が改革の途中で老中を降りた時、老中に就き定信の意思を継いで改革を主導する事になる。

隼人は師の間中晋平との稽古で汗にビツシヨリと濡れた稽古着のま

ま、木刀を道場の木刀掛けに戻し、道場裏手にある井戸端で上半身裸となり、冷たい井戸水に浸した手拭で汗を拭っていた。

「隼人さん、先生との稽古が終わった処ですか」

朝の稽古に來た門弟の旗本三百石で書院番柳沢寿一朗しゅいんぱんやなぎさわじゅいちろうの弟の又二郎またじろうが声をかけた。

又二郎は隼人が教える門弟の中でも筋がよく、二十才前に切り紙（免許皆伝の一步手前）を取った腕前だ。

「隼人さん、来月の五番方合同稽古は頑張ってくださいね」

「小十人組から出るのは若手ばかりだ。上の人達は恥を掻きたくないそうだ」

隼人は自信なさそうな口振りで言った。

「いや、隼人さんならきつと勝ち抜けますよ」

明るい声で又二郎は隼人に言った。

「まあ、こんなことでもないとお城のお勤めは昼の弁当を食べに行くようなもので、退屈な毎日が続くだけだからな」

生来暢気なのか、五番方合同稽古の出場についても隼人は気楽に考えていた。

「隼人さんは役に付いているからそんなことが言えるのです。私の家は兄が継ぎ、兄に男の子が生まれた今は、私なんか厄介者です。」

養子の口が掛からなかったら、一生兄の屋敷の部屋住みですよ」

隼人は父の新之助しんのすけの引退により、小十人組見習いから本役へ上がったのが三年前。

隼人の母「たか」は五年前に亡くなり、三年前に娶った妻の「みゆき」も昨年こぞの秋に、子を成す前に流行り風邪をこじらせて亡くなり、今は父新之助との二人暮らした。

単調なお城勤めには飽き飽きして、間中道場での稽古が唯一の生甲斐となっていた。

「五番方合同稽古」は、浜町はまちょうの若年寄磐城平藩主安藤信成わかとしよりいわきたいらはんしゅあんどうのぶなりの中屋敷道場で行われる。

当日、めつたに開く事のない中屋敷の表門は老中首座の奥州白河藩主松平定信を迎える事もあり、大きく開らかれていた。

百畳もある道場の板の間は磨かれ、上段の見所の畳は真新しくなっていた。

五番方合同稽古への出場者は二百名。二十名以上の磐城平藩士が、出場者の着替えの間への案内に追われていた。

二百名の出場者は東西百名ずつに分かれ、名前と流派が出場順に書かれた紙が大きく道場の板壁に張り出された。

出場者の流派を見れば、柳生新陰流、小野派一刀流、神道無念流、心形刀流、神道新当流、直心影流など有名な剣術や宝蔵院流、香取

神道流など槍術の流派の名も並び、太平真行流など聞きなれない流派は内藤隼人以外にはいない。

合同稽古では防具を身に付け、竹刀か稽古槍を使用し、木刀は禁じられていた。

稽古は東西より一名ずつ順当りで行い、五人抜きを達成すればそこで「勝抜け」となる。

審判は柳生新陰流江戸道場師範の上野太郎佐衛門と小野派一刀流の小野忠行の二人が交互に行う。

五番方合同稽古の前日、隼人は三番町にある小十人番頭の一人、旗本千石の日枝武左衛門の屋敷に同じく五番方合同稽古へ出場する前田五郎佐と一緒に呼ばれた。

五番方と称されていても、大番、書院番、新番、小姓組が騎馬役であるのに対し、小十人組だけが徒歩役で、他の番方より下に見られている。

番頭の日枝武左衛門はそんな風潮をこの合同稽古で晴らせと二人を叱咤した。だが、日枝が期待をしていたのは神道無念流の免許皆伝の前田五郎佐に対してで、隼人には余り期待を掛けているようには思えなかった。

日枝の屋敷から組屋敷へ戻っても、父の新之助から注意を受けた。

「明日の五番方合稽古に小十人組の中より選ばれた事だけでも内藤家の誉だ。日頃から剣術の修行に励んでいる事が認められたのだ。しかし、どの様な相手と手合わせをしても四人抜きまでに留めておけ」

「わざと負けると言われるのですか」

「我が内藤の家が小十人組に上がって、そなたでまだ三代目だ。お歴々の中では未だに新参者。余り目立つと組中でも色々と面倒な事が起きるのはお前もわかるう」

「五人抜きなど心配しなくても大丈夫。明日は一回でも勝てるかどうかわかりません」

当日、隼人は何時もの通り明け七つ（午前4時）には起き上がり、毎日の日課である半刻（1時間）の素振り行つてから、湯島天神裏の三組町の組屋敷を出た。

神田明神の境内を抜け、昌平橋を渡り、鍛冶町、小伝馬町、入船町から大川沿いの浜町にある磐城平藩中屋敷へ向かった。

明け五つ（午前八時）から始まった五番方合稽古、内藤隼人は西方十八番目で出場だ。

隼人の出場の順番が来たとき、そこまでの勝抜きは書院番で神道無念流の北村玄馬の三人抜きが最高だった。

隼人の最初の相手は直心影流の大番与力奈良林信吾で、既に三人抜きを決め、隼人に勝てば初の四人抜きとなる。

三間（5・4m）の間合いで、奈良林は正眼、隼人は高正眼に構えた。

奈良林は今まで三人抜きの疲れか、肩で息をしていた。勝負を急いだ奈良林は上段から一気に隼人の胸を狙ってきた。

隼人は高正眼から奈良林の竹刀を受けると、巻き落とすように小手を撃った。

この隼人の一撃が決まり、奈良林は竹刀を取落とし、隼人は最初の勝利を収めた。

二番手は小野派一刀流書院番の室田兵衛門。

室田が正眼で様子を見ようとすると、隼人は高正眼から三間（5・4m）の間合いを一気に詰めて小手を奪った。

三番手は小姓組見習の篠谷武左衛門。直心影流の免許皆伝で腰が据わった上段より、隼人の面を撃ち抜くような鋭い一撃を見せた。

隼人は篠谷の鋭い撃ち込みを受け流すと、斜に廻した竹刀で出小手から胴打ちの変化で篠谷を退けた。

隼人が三人抜きを達成すると、道場の控えや見所の方がざわざわと色めき立った。

見所では若年寄で藩主の安藤信成が脇に控える藩剣術師範役の遠藤伊織（ういあり）に尋ねていた。

「太平真行流というのは余り聞いた事のない流派だが、どのような流派か知っておるか」

「戦国の終わりに、下野国の一の宮である日光二荒山神社の神官であつた若菜真行齋（わかなしんぎょうさい）を開祖とする流派だと聞いておりますが、詳しい事は……」

老中首座の松平定信は脇に座る奥州白河藩の江戸留守居役の室田吉五門（むろたけいごもん）に何事かを言いつけた。

「確か、江戸では下谷辺りに一軒だけ道場があるとか」  
控えで待つ武士の間にも静かなざわめきが広がった。

「あの者はだれだ」  
「太平真行流とはどのような流儀だ」

そんな中で四番手として登場したのが愛洲新影流新番与力の今村宗右衛門（いまむらそつえもん）だ。

今村の剣の腕前は新番方ばかりでなく他の番方にも広く知られていた。

「内藤とやらも今村殿が相手では厳しかろう」  
「ここまでだな」

そんなざわめきが控えの中に広がった。

両者はそんなざわめきとは関係なく、道場の中央に進み出て軽く竹刀を合わせた。

隼人が他流派の者と竹刀を交えるのは、今日が始めて。自分が修行してきた太平真行流がどの程度通用するかを見極めようとする気持ちで臨んでいた。

だが、今村にはこんな無名の者には負けられないという気持ちが有り、その分だけ肩に力が入っていた。今村は待ちの構えである下段で、隼人の出方を伺った。

隼人は今までと同じ高正眼から今村の小手を狙って竹刀を素早く繰り出した。今村の下段からの竹刀は隼人の竹刀に巻き込むように絡んできたが、僅かに小手には届かず鏢迫り合いとなった。

今村は隼人の竹刀を下から押し上げるように攻めてきた。隼人は逆に今村の力を逃がす様に竹刀を引き、右足を飛ばして今村の体勢を崩し、胴を打った。

「勝負有り」

審判を務める小野派一刀流の小野忠行が内藤隼人の勝利を告げた。

この瞬間、合同稽古で隼人が始めて四人抜きを達成した。このまま、この無名の小十番組の若者が五人抜きを行ってしまうのかと道場の誰もが思った。

東方より隼人の五番目の相手として、大番で忠也一刀流の佐々木尚也ささきひがのっそりと道場に立ち入った。

佐々木は身長も六尺（180cm）を超え、胸板は厚く、がっしりした巖いわおのような体格をしていた。

隼人は得意の高正眼に構え、佐々木の出方を窺った。これまでの四番の試合で幾分か息は上がり、隼人は肩で息をするようになっていた。

佐々木はその大柄な体格に似合わず、俊敏な動き出しで隼人の小手から胴、突きと連続技で攻めてきた。

隼人は佐々木の速さに付いて行けず受け身に廻り、突きから一転して放たれた片手上段からの面を受け敗れ、隼人の合同稽古はそこ

で終わった。

隼人を破った佐々木尚也ささきひさなりが唯一の五人抜きを達成し、四人抜きは隼人と新番の能村正仁のむらまねひとの二人だけだった。

この五番方合同稽古により、小十人組内藤隼人の名は若年寄の安藤信成や老中の松平定信の中にも刻まれた。

天明八年も五月（旧暦）に入ると、江戸の街には木々の青葉をシトシトと濡らす梅雨が降り続き、晴れ間は滅多に覗かなかった。

通りは泥濘、道行く人々や荷を運ぶ大八車は苦勞した。長屋住まいの大工や左官など出職の職人は雨が何日も続くと手間賃が入らず、明日の米代に困る者も出てきた。

陸奥白河藩主松平定信が老中首座に就任して凡そ一年近くが経過し、田沼意次に繋がる者として最後まで幕閣に止まっていた沼津藩主のみずのただとも水野忠友も三月末には老中職を罷免され、幕閣内からは田沼色が一掃されたように思えた。

呉服橋御門脇にある評定所ひょうていじょは幕府の重要施策や諸大名、旗本の訴訟、町奉行や寺社奉行など複数の奉行所の管轄にまたがる問題の裁判などを行う場所で、町奉行、寺社奉行、勘定奉行の三奉行に若年寄、老中が加わる事もあった。

五月に入って行われた評定において、今月の月当番である北町奉行の瓜生久光うりゅうひさみつよりこの一ヶ月で浪人の斬殺死体が四件あった事が報告された。

その他に直接町奉行の管轄に入らないが、旗本、御家人や大名家の家臣などの斬殺死体も五件以上あった事が町廻りの同心より報告されていると告げた。

北町奉行の瓜生に引続き、若年寄の安藤信成あんどうのぶなりが祐筆ゆうひつへ上がった旗本、御家人の病死相続願いがこの一ヶ月に八件以上もあったと告げた。

「詳細は今だに判明しておりませんが、これらは江戸の市中に武士を狙う辻斬りが横行しておる証と考えられます。旗本、御家人、諸大名家の家臣、浪人の区別なく辻斬りが行われ始めたのは四月の末

頃と思われず。浪人者については町奉行所の管轄なので、はつきりとその人数が四人であると把握出来ております。しかし、旗本、御家人、諸大名の家臣については辻斬りに遭っても屋敷へ引き取られ、病死との届けが出されれば正確な数は不明となります。そこで、若年寄の安藤様にお願ひして病死相続願ひを出した人数を数えていただきました。ですが、これには諸大名方の家臣の数は含まれておりません」

北町奉行瓜生の言葉は評定に出席していた老中の松平定信に衝撃を与えた。

「安藤殿、先ほどの病死相続願ひの人数は確か」

「祐筆の下に届出の数です。全て三十代、四十代の者で前日まで元気に役目に就いておりました」

「瓜生殿、下手人の目処はいるのか」

「一人や二人の仕業とは思えぬところがございます。南町の牧野殿と協力し、夜の町廻りを強化しておりますが、今のところ目処はついておりません。町民への被害はありませんが、辻斬りの噂が広まるのを止める事は出来ず、不安が広がっております」

「辻斬り騒動で世情を騒がすか。一体誰がそのような事を。町方だけでなく、火盗も動員し、なんとしても下手人を捕まえるのだ」

老中の松平定信は瓜生久光、まきのただめき牧野忠明の両町奉行と若年寄の安藤信成に厳命した。

小十人組の内藤隼人は三日登城し、一日の休みとなる務めを怠ける事なく続けていた。

隼人が小十人組頭の榊原源衛門さかきばらげんえもんに呼ばれ、檜之間ひのきのまの控えに入ったのは、梅雨を感じさせる五月（旧暦）中旬の事だった。

組頭榊原源衛門とは湯島三組町ゆしまさんくみちょうの大縄地でも屋敷が近く、父新之助の代より親しくしていた。

厳しい顔で部屋に入る隼人を見た源衛門は一言、隼人に聞いた。

「その方、最近不始末を仕出かしたとか、身に覚えはないか」

「特に何も。榊原様もご存知の通りでございますが。一体、何事です」

隼人は不安げな表情で源衛門に問い掛けた。

「先程、番頭の日枝様に呼ばれ、その方の小普請入りを告げられた」

「何故です。小普請入りするような事は何もしておりません。何かの間違いでは」

「わしも不審に思つて訳を聞いたが、日枝様も不審がるばかりで、  
.....」

小普請組は三千石以下の旗本、御家人で無役の者が入るが、役目上で不始末を仕出かした者、風紀を乱した者、不行跡者などが追いやられる事が多い。しかも、一度小普請入りすると中々に役に戻れず、無役の代名詞として旗本、御家人に嫌がれた。

「組屋敷も今月末までには移るようにと言われた。新しい組屋敷は小普請組頭の井出寅之助殿いであらのたけより知らせが行く」と告げられた。

翌日から内藤隼人は何もやる事がなくなつたが、北大門町の間中道場へも通う意欲もなくなり、父の新之助も一拳に老け込んで部屋から余り出なくなつた。

三日後には、新しい組屋敷が川向ここの北割下水近く、本所松倉町に決まつたと知らせがあつた。隼人がその組屋敷を見に行くと、板塀は半分欠け、畳や襖も破れが目立ち、手入れは余り行われていない古びた屋敷だつた。

隼人は五月末を待たず、梅雨の晴れ間を見計らい本所松倉町の組屋敷へ引越しを行った。

引越しを行ったその夜、小十人組頭の榊原源衛門さかきはらげんえもんが本所松倉町の組屋敷を訪ねた。

下城姿のまま、わざわざ本所まで来たようで、雪駄履きに袴、小者を一人連れていた。

「湯島も古いが、この屋敷も随分と古いな」

榊原は奥の八畳間に通るなり、隼人に言った。

「わざわざ、お寄りいただき申し訳ございません」

「今日立ち寄ったのは他でもない。若年寄の安藤様に呼ばれ、その方への使いを頼まれたのだ」

急に若年寄安藤の名が出たので、隼人は驚いて榊原の顔を見た。

「安藤様はそなたに命じる事がある、それまで身を謹んでおれと言われた。その方の小普請入りには表に出せぬ事情があるようだ。心して置け」

榊原はそれだけを告げると、早々に湯島三組町の組屋敷へ戻った。

隼人は榊原からの話で何やら新しい命が下り、小普請入り長く続くことは無いと一安心した。

だが当面は何もやる事がないが、北大門町の間中道場に通うには遠すぎた。

師の間中晋平や弟子の柳沢又二郎辺りは隼人の小普請入りを随分と心配していたので、行かなければと思っていたが、中々に気が向かず、本所へ移ってからまだ一度も道場へは顔を出していない。

隼人は本所へ移ってからは、朝から釣竿を担いで大川の御みくりやがし既河岸へ出かけ、ぼんやりと釣り糸を垂れ、帰りがけにあいおいがし豎川の相生河岸近くの煮売り酒屋で酒を飲んで帰るといのが日課となった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9130p/>

---

影御用

2011年1月9日07時09分発行